

の真摯な試みとしての意義も確実に存在している。対立、暴力ばかりがクローズアップさ

れる一方で、このような対話を志す動きがあることも見逃してはならないだろう。

---

## サッカーにみるパレスチナ人と難民

岡部友樹\*

チリのサッカーチームである *Club Deportivo Palestino* が背番号に歴史的パレスチナの地形を模った「1」を使用し、話題を呼んだことはあまり知られていない。このチームはもともとチリに移住したキリスト教徒のパレスチナ人が主体となり 1920 年にサンティアゴで結成したものである。また *Bank of Palestine* がこのチームのスポンサーとなり、近年ではパレスチナ西岸地区へのツアーを企画するなど、国際的なつながりを強めている。サッカーという世界中に広がった庶民の親しみのあるスポーツは、国境を越えて人々のアイデンティティを想起させる。そして本稿で描くヨルダンのパレスチナ難民とイスラエルのパレスチナ人は、サッカーというレンズを通すことによって異なるアイデンティティの表出の仕方がみられるのである。

筆者は現在東アラブ地域（現在のシリア、レバノン、イラク、パレスチナ／イスラエル）におけるパレスチナ難民に関して研究を行なっている。本稿では 2016 年 8 月～10

月にかけてのヨルダンおよびパレスチナ／イスラエルでのフィールドワークをもとに、サッカーを通してパレスチナ人のアイデンティティの一側面を検討したい。

9 月 3 日日曜日の正午、私はヨルダンの首都アンマン郊外のアシュラフィーエの丘に登ったところにあるワヘダート難民キャンプに赴いた。アシュラフィーエの丘からは首都のアンマンを一望することができ、近くには赤十字病院や、少し歩くと 18～19 世紀に強



写真 1 日曜日のワヘダート・キャンプのスクーの様子

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

制移住させられたチェルケス人が作ったというアブー・ダルウィーシュ・モスクがある。もともとワヘダート難民キャンプは 1948 年に起こった第一次中東戦争の際に、難民となったパレスチナ人を収容するために 1955 年に作られたものである。

このキャンプはパレスチナ解放運動の前線基地としての歴史をもっている。ワヘダート難民キャンプはパレスチナ解放機構 (PLO) やパレスチナ解放人民戦線 (PFLP) の根拠地となっており、1970 年に起こったヨルダン政府とパレスチナ解放勢力間の内戦 (通称「黒い九月」事件) を境に、それらの勢力はレバノンへと追放された。また UNRWA (国連パレスチナ難民救済事業機関) によれば、キャンプの正式名はアンマン・ニュー・キャンプであるが、「俗称」としてワヘダートと呼ばれている。もともとアラビア語の「ワヘダート」(wahadāt) は 1 つの単位すなわちユニットを意味し、当該キャンプが 0.48 平方キロメートルの狭い土地に人々が混住する場所であったことに由来する。そこから現地の方言によって「ワヘダート」難民キャンプと呼ばれるようになった。現在ではその景観からして「キャンプ」というよりも、アンマン郊外の一角といったほうが正確であり、訪れた日が日曜日であったためにスーク (市場) は多くの人々で賑わっていた。

パレスチナ解放運動が残した戦跡は、現在の平穏なキャンプの日常からは想像しがたいが、現在パレスチナ人のアイデンティティは解放闘争とは別の形となって現れている。そのひとつとして 1956 年に作られた「アンマ

ン・ワヘダート・スポーツクラブ」のサッカーチーム「Al-Wahdāt」がある。このチームは難民キャンプで結成され、メンバーも大半がパレスチナ人であることから、ヨルダンのパレスチナ人のみならず東アラブ地域に離散したパレスチナ人の支持を広く集めている。このチームは 1948 年以前から現在のヨルダン領に居住するトランスヨルダン系のサポーターが多い「Al-Fayṣal」というチームとの 1986 年のある試合を契機に一躍有名になった。

当時の状況は 1970 年のヨルダンでの内戦を経て、両者の対戦はパレスチナ人への警戒心が依然として強く、警官が多数見守る中で行なわれた。その試合では、徐々に力をつけて一部リーグにのし上がったパレスチナ側の「Al-Wahdāt」とトランスヨルダン側の「Al-Fayṣal」の間で扇動的なシュプレヒコール合戦となった。その結果、サポーターたちによる暴動が発生し、「Al-Fayṣal」側に 1 名の死者が出てしまった。パレスチナ側のサポーターには「我々はフィダーイーーン (パレスチナ解放戦士) だ」と叫ぶ者もあり、そ



写真 2 ヨルダンの難民キャンプ内にある UNRWA の学校でサッカーをする子どもたち

ここにはヨルダンにおいてパレスチナ人のアイデンティティを声高に唱道する新たな場としてのサッカーが現出したといえよう。この事実からパレスチナ側の暴力を見取るのではなく、むしろ着目されるべきは、これまでのパレスチナ解放運動に収斂されない多様な形態の「政治的な行動」の在り方である。

次にイスラエル・アラブのサッカークラブ「Ittihad Abna' Sakhnin (以下 Sakhnin)」をみていきたい。筆者はヨルダンから陸路でイスラエルに移動し、10月の初めには地中海を臨む北部の都市ハイファーに1週間ほど滞在した。そこで泊まったホテルの管理人のひとりである青年は赤いクーフィーヤ（アラブ地域の男性が頭や首に巻く民族的装身具）を首から下げて、自らをイスラエルに住むパレスチナ人であるといい、私に「Sakhnin」というサッカーチームを紹介した。

1948年のイスラエル建国によってパレスチナ人が周辺の東アラブ諸国に離散したが、その中でも一部がイスラエル領内に残り、現在ではイスラエル総人口の16%を占める100万がいる。イスラエル国籍をもちながらもアラブ市民またはパレスチナ人として生きる人々はアラブ・イスラエルと呼ばれている。彼らは北部のガラリヤ地方に多く居住しており、その中でも筆者が訪れたハイファーはムスリムとキリスト教徒が混住して、アラビア語とヘブライ語が混交して話される多文化・多言語都市である。ハイファーから西に70キロほど行ったガラリヤ地方の中心部



写真3 映画 After the Cup: Sons of Sakhnin United (2009) のポスター

に位置するサハニーンという町は、上述のサッカーチーム「Sakhnin」を擁し、ムスリムが大半を占めて10%ほどのキリスト教徒が住む町である。この町が有名になったのは1976年3月30日に起きたイスラエル政府による土地の接収に対して抗議したアラブ人6人が死亡した事件を契機とする。この事件は「土地の日 (Land Day)」と記念されており、死亡した6人のうち3人がサハニーン出身であったために、この町は土地に対する闘争のメルクマールとなった。さらに「土地の日」を象徴するように6人の殉教者のモニュメントがサハニーンを中心部の墓地に建てられている。

そのような町にできたサッカーチームである「Sakhnin」は「Ha-po'el Sakhnin<sup>1)</sup>」(1961年設立)と「Maccabi Sakhnin<sup>2)</sup>」(1966年設

1) 「Ha-po'el」は労働者を意味している。また、ヒスタドルート(ユダヤ人労働総同盟)からの金銭的な支援を受けており、労働シオニズム政党のマパイに近い富裕層が支持していた。

立) が 1992 年に合併して出来たチームである。このチームはイスラエルのプレミアリーグ一部に昇格を果たし、国内でも屈指の実力を誇る。その活躍ぶりから最近ではこのチームの活躍を象徴する映画も作られている。その映画の中ではイスラエルの首相を務めたシモン・ペレスが登場し、アラブ人とユダヤ人の共存を「Sakhnin」に求めている。

「Sakhnin」のサポーターは、イスラエル右派の支持者が多い「Beitar Yerushalaim (Jerusalem)」と対戦した際に、ヨルダンの場合とは異なる様相を呈した。試合に警官は動員されたものの、暴動は起こらず、「Beitar Yerushalaim」側の扇動的な声援にもかかわらず、沈黙を保ったのである。「Al-Wahdat」と「Sakhnin」において集合的アイデンティティの表出の仕方がサッカーという共通項を通じて異なる。前者はヨルダンに限られないパレスチナ・アイデンティティを主張するのに対して、後者ではパレスチナよりもむしろサハニーンという土地に刻印されたアイデンティティつまりローカリズムが強く主張されている [Sorek 2007]。後者にはとくにイスラエル・アラブとしての「配慮」または「生存戦略」があるともいえる。すなわちサッカーが民族主義的な主張の場となるという一般的なテーゼがあるとしても、その射程はイスラエル国家という枠組みによって制限されており、あえて紛争や対立を煽るような宣伝はしないというのがイスラエル・アラブ側の

生存戦略または現状としてそうあるのである。

サッカーに限ればイスラエル・アラブはパレスチナ・アイデンティティを押し殺しているように映るが、その一方でハイファーの滞在先で出会った青年のように「パレスチナ人としての誇りを忘れない」ためにパレスチナを表象する赤いクーフィーヤを巻き、アラビア語を積極的に使うことによって「占領者」の言語であるヘブライ語の侵食に抗する姿勢をみせる者もいる。故アラファト PLO 議長は「いつの日か我々が声を失くしたとしたら、Al-Wahdat が我々の声となるだろう」と喝破したという [Tuastad 1997]。2カ国でのフィールドワークを通じてパレスチナ人のアイデンティティを取り巻く環境をサッカーという視点から垣間見ることができた。今後の研究では東アラブの国家がマイノリティ（とくにパレスチナ人）をいかにコントロールしており、それに対してマイノリティ側はどのように懐柔・対抗しているのかという双方の点を具体的に検討していきたいと思う。

#### 引用文献

- Sorek, T. 2007. *Arab Soccer in a Jewish State: The Integrative Enclave*. New York: Cambridge University Press.
- Tuastad, D. 1997. The Political Role of Football for Palestinians in Jordan. In G. Armstrong and R. Giulianotti eds., *Entering the Field: New Perspectives on World Football*. Oxford: Berg Publishers, pp. 105-122.

2) 「Ha-po'el Sakhnin」のライバルであるスポーツ組織によって作られ、低所得層が支持していた。また、このクラブのサポーターは、アラブ人とユダヤ人の共存を訴えて反シオニストを掲げるイスラエル共産党の支持者が多かった。